

## 令和3年度 奈良市立辰市こども園 研究実践概要

園長名 辻 久代

全園児数 181名

## 1. 研究主題

「心動かし、意欲をもって生活する子どもをめざして」  
～身近な人との伝え合いを通して～

## 2. 研究年度 3年度

## 3. 研究主題設定理由

子どもは明るく素直で自分の思いを言葉で表現しようとしているが、友達や様々な人に思いを伝えられず、泣いてしまう子や、すぐに手が出てしまう子、伝えることに自信のない子などの姿が見られる。

今年度は身近な人に親しみを持ち、自分の気持ちや思いを伝えたいような関係、関わりを探りたいと思い取り組みを始めた。

## 4. 具体的な研究内容

## ① 研究のねらい

- ・職員間で0～5歳児の育ち、身近な人の捉え方を明確にすることで発達の見直しや保育者の援助や環境構成のあり方を考える。

## ② 研究の重点

- ・各年齢の事例や写真を持ち寄り、環境構成や援助、身近な人の捉え方など、年齢ごとに分析し、子ども理解に努める。
- ・乳児・幼児の職員間で連携を取りながら、具体的な取り組みを話し合い主題について共通理解を図る。

## ③ 活動の方法

## 【写真から子どもの姿をよみとる】

遊びの中で心が動いている写真から、年齢毎の発達に応じた遊びや関わり方を保育者間で共有し、子どもの見方や捉え方について話し合う。

## 【乳児】

0歳児 10月【特定の保育者との愛着関係】

A児「ん！ん！」と声を出しながら保育者のところへやってくる保育者を抱きしめ、嬉しそうに笑顔を見せる。A児が保育者の肩を触りながら後ろに回り「う！」と言いながら顔を出す。「Aくんみつけた！」の保育者の声と振り向く動きを見て「きゃっきゃ」と反対側に隠れる。A児は笑顔で嬉しそうに「ん！ん！」と交互に隠れて顔を出し保育者が見つけるという動作を繰り返す。



〈考察〉

特定の保育者がA児と顔を見合わせて笑顔で遊び、A児の気持ちに共感することで、保育者との遊びを繰り返していた。安心して過ごす中で「ん！」「う！う！」と喃語や表情などで気持ちを表現する姿が見られた。また子どもの思いを受け止め、言葉にならない思いを保育者が言葉で表現するなど、1対1で丁寧に関わることを大切にすることで、子どもとの愛着関係を築いてきた。

1歳児 7月【保育者との信頼関係を深める】

A児がチェーンリングを食べ物に見立てて食べる真似をしている。保育者が「おいしそうね～」と言うとA児が保育者にスプーンを向ける。「もぐもぐおいしいね。ありがとう」と保育者が食べる真似をする、A児は満足気に微笑んで繰り返し食べさせようとしている。その様子を見ていたB、C児も同じようにチェーンリングをお椀に入れ、スプーンを持ち保育者の方へ来た。二人も保育者に食べさせようとし、保育者はそれぞれの子に食べる真似をして繰り返し遊んだ。



〈考察〉

A児の行動に保育者が応答的な関わりをすることで、「もっと食べてほしい」と子どもの意欲を引き出し、繰り返し遊ぶ姿に繋がった。他児もA児と保育者との遊びに関心を示し、やってみようとするきっかけになった。

2歳児 2月【保育者が仲立ちとなり、遊びや友達との関わりを広げていく】

A児が「せんせーかくれんぼしようよ～」と保育者に自分のしたい遊びを伝える。保育者は「いいよ！しょうか」と、応える。A児は「じゃあ先生おにね！Aがかくれるね」と嬉しそうに微笑み、その様子を見ていたB児が「ぼくもかくれる！」と伝える。保育者は「Bくんも一緒にしよう。10数えるから隠れてね」と言うと2人は笑顔で走り出しハウスの中に隠れる。数え終わると「Aちゃん、Bくんどこかな。こっちな。あれ～いないなあ。」とハウスの周りを歩いたり、あたりを見まわしたりしながら探す。2人は「きゃっきゃっ」と笑いながら窓から顔を出したり、人差し指を口にあて「しーやで！」と、顔を引っ込めたりしながら保育者の様子を伺っている。姿は見えているが目線を合わせないように探し、ドキドキする気持ちが味わえるようにする。2人は壁に背中をつけ、保育者の方を見ながら笑顔で隠れている。保育者は窓から中をのぞき「Aちゃん、Bくんみつけた！」と目線を合わせる。2人は「きゃー！」と目と口を大きく開き驚いた表情をし「みつかっちゃった～」と笑顔で喜ぶ。A児は「つぎはおにをする。せんせいかくれてね。」と保育者に伝え、その後、何度も楽しんでた。



〈考察〉

大好きな保育者に気持ちや思いを受け止めてもらったり一緒に遊んだりすることで、したい遊びを十分楽しみ繰り返し遊ぶ姿が見られた。遊びの中で保育者に見つからないように一緒に隠れたりドキドキする気持ちを共有したりすることで、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができた。

## 【幼児】

### 3歳児 9月【保育者との関わりを基盤にして友達に興味を持つ】

A児は段ボールの形からイメージして「なんかメガネみたいやな」と遊んでいる。保育者は「本当だ、メガネみたい」と見守っていた。A児は、段ボールを横にし机の角に立っている。そこに電車に乗ったB児がやってくると、A児は横にもっていた段ボールを上へ上げ「これは信号やねん」と保育者に伝える。保育者は「信号か。いいね。踏切みたい」と、考えを認めるとA児「カンカン・・・」と踏切の音を真似ながら、友達の電車が来るまで待っている。そこへ電車に乗ったC児がくると、A児は信号を上げ下げする。C児はA児が何をしているかわからず、その場に立ち止まっていた。保育者は「Aくん電車の信号しているんだって」と伝えると、A児「これ信号やねん」と言いながらC児が通っていく様子を嬉しそうに見ている。A児は、はにかみながら次の友達が来ることを待っていた。



#### 〈考察〉

保育者がA児の“信号”というイメージを認め、C児にA児の思いを代弁したことで、A児の踏切というイメージがつながった。A児は信号をB、C児に通ってもらえた嬉しさを感じ、保育者も共感したことで、自分のしたい遊びを十分に楽しんでいた。

### 4歳児 6月【個別から集団へ友達との関わりが広がっていく】

新しいことに興味をもっているが自分からしようとするのが苦手なA児。ビニール袋に水とクローバーの葉を入れ揉んで色水を作ろうとしている。A児「先生、なかなか色できない」保育者「なんでできないんだろうね？ どうしたらいいかなあ」と本児の思いを受け止めながら少しだけ強く力を加えて色を出す。A児は何度かやるがやはり色が思うように出ず「ならない」と言う。「そっかあ、みんなどうやって色出してるんかなあ？」と一緒に考えながら、近くで濃い色を出していたB児に「すごい色出てるね。どうやって作ったん」と聞く。B児「これでガリガリしてん」とザルの上でクローバーをこすった事を言う。A児に「どうする？ やってみる？」と聞くがA児は「ううん。これでやる」としばらくビニール袋でやってみたが、思うように色が出ない。そこへC児が「見て、先生。こんな色できた」と緑色が出たことを伝える。「わあきれいな色になったね」とC児の喜びに共感する。保育者は「Cちゃん、これどうやってしたん？」と聞くとC児はすり鉢とすりこぎを指差し「これでした」と言う。保育者は「どうする？ これでやってみる？」とC児とのやりとりを横で見ていたA児に提案すると「うんやる」とすり鉢を持ってきた。その様子をB児は感じ「ここに水とクローバー入れてゴリゴリするねんで」とA児に知らせた。A児はC児に聞いた方法で色水をつくり「先生、見て見てメロンジュース出来た」と嬉しそうに見せた。



#### 〈考察〉

遊びの中でB児やC児のやっている様子を知らせたことで、友達のしていることに刺激を受け、A児のやってみたいという思いが実現した。また、C児は同じ場で遊んでいる友達の存在を感じ伝えようとする姿につながった。

## 5歳児 10月【友達など他者との関係の中で互いに育ちあう】

運動遊び参観に向けてリレーに取り組んでいる。最初はA児「私1番がいい」B、C児「アンカーがやりたい」と自分のやりたい順番を言ったりB児「じゃんけんで決める?」と意見を出し合ったりしていた。毎日リレーをするうちに、赤チームばかり勝つ日が続いた。「なんで赤チームばかり勝つのかな」と、もう一度順番決めをすることになった。「男・女・男・女にしよう」「遅い人が先になったら?」と話す。走ることや注目されることが苦手なD児は「先に走りたい」と話す。すると以前、友達に速いことを認められたE児は「Dの後で僕ががんばるから大丈夫やで!」とD児に言う。その様子を見て普段はあまり自分の思いを友達に伝えないF児は、小さい声だったが「僕1番やっいいい?」と言うと、「Fにしてあげよう」と、1番がやりたい子も譲った。いつも2番目を頑張っているG児の気持ちもくみ、3番目から順に手をあげ、遅い子や苦手な子から速い子の順に決めた。「みんなでがんばろな」「次は絶対勝とうな」と意気込み取り組む。青チームが勝つことができ、大喜びする。



### 〈考察〉

保育者がそれぞれの思いを伝え、話し合いを繰り返すことで、徐々に子ども達同士で折り合いをつけていく様子が見られた。負けた悔しさ、勝てた喜びを味わい楽しく継続して取り組むことで自分の意見を押し通すだけでなく、相手に譲ったり意見を調整したりすることができた。走る順番を自分達で相談し、何回も変えて取り組むことで友達と同じ目標をもって自分の力を存分に出す充実感を共有することができ、クラスの友達関係が深まった。

## 5. 研究の成果

- ・職員間で0～5歳児の育ち、身近な人の捉え方を明確にすることで発達の見直しや保育者の援助や環境構成のあり方を考えることができた。保育者が子ども一人一人の経験や気持ちに気づき温かく共感的な関わることで、安心して園生活を送ることにつながっていき、自信をもってまわりの保育者や友達と関わる力が育まれることを再認識した。
- ・遊びの写真を見て、複数の保育者が見方や捉え方について話し合ったことで、子どもが何に心を動かしている瞬間なのか、子どもの興味や気持ちに沿った言葉掛け・援助のあり方が大切であることがわかった。

## 6. 今後の課題

- ・保育者との関わりを通し、気持ちが安定していくことで自分から遊んでみようとする姿につながり、周りの保育者や友達へ興味も広がってきている。その姿をもとに、興味をもって繰り返し遊びに取り組んでいけるような援助や環境構成を考えていきたい。
- ・保育者間での子どもの姿を共有することについては、意識をもって子どもの姿を見取ろうとしているが、ただ見取るだけでなく、着目する点を明確にして今後も継続的に行い、子ども一人一人の実態や特性に応じた子ども理解に努めていきたい。